

—牧師室から—

愛読書はなにですかと尋ねられたとき、劇作家ベルト・ブレヒトは「お笑いでしょうが——聖書です」と答えた。「帯」にこう書かれた「私にとって聖書とは」を大変興味深く読んだ。哲学者、自然科学者、文学者、神学者、精神科医、ジャーナリストなど信仰のない人も含め16名が、聖書をどう読み、どう関わってきたかをドイツでラジオ放送したものを翻訳した本である。

ユダヤ教は旧約聖書を、キリスト教はそれに新約聖書を加えて「聖典」としてきた。しかし、聖書は一宗教団体の「書」だけではない。信仰、不信仰に関わらず人類史に測り知れない影響を与えてきた。ユダヤ人の聖書との結び付きの深さにはさすがに感嘆する。編者のハンス・エンゲル・シュルツは序言で、ユダヤ教神学者のレオ・ベックの言葉をひきながら、聖書は断片的で、非教義的で、体系がない、できあがった公式がなく、探し求めつつあり、危機的で、幻滅をもたらすものでありながら、

小さな、あるいは大きな希望に満ちている、と書いている。キリスト教神学者は聖書を一つの体系でとらえようとするが、とらえたと思ったものも聖書のほんの一断片で、聖書の生命的な多様性はベックの言う通りであろう。

「我と汝」の著者・ユダヤ人哲学者のマルティーン・ブーバーは「人間的なものの外へ出てしまっ

ては、神的なものに近づくことができない。人間は、そうなるべく自分が作られている人間となることによってのみ神に近づきうるのである」と言っている。人間を問うことは神を問うことであり、神を問うことは人間を問うことであるという弁証法は真実である。

私は高校三年生の時はじめて聖書を読み、神の高さと人間の悲惨さと歴史の奥行に大きな衝撃を受けた。そしてイエス・キリストの赦しにしがみついて生きてきた。聖書理解の浅さを改めて知らされたが、もし聖書を読まなかったなら私の人生は全く違っていた。その違いは「私になる」求道の道を見出したことである。

週 報

1995年1月8日 降誕節第2主日

巻15 41号

1994年度教会主題

「十字架のキリストを証する」

- 聖句 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。
コリントの信徒への手紙一 6章20節
- 目標 1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
2. 一人一人が伝道と奉仕を。

日本キリスト教団

横浜港南台教会

〒233 横浜市港南区港南台 7丁目-8-29

電 話 045-833-5323

ファックス 045-833-6616

振 替 00290-4-13994

牧師 秋 吉 隆 雄